

## 鳥瞰の視線を考える 『生活絵引』作成における歴史学、民俗学と美術史学の合流点をめぐって

池田 貴夫 (北海道開拓記念館 学芸員) IKEDA Takao

筆者は、2006年12月26日に行なわれた神奈川大学COE公開研究会「人びとの暮らしと生業」に一般参加した。菊池勇夫氏による菅江真澄が描いたアイヌ・コタンの風景についての研究発表、田島佳也氏による『松前松山屏風』や土屋又三郎『農業図絵』に描かれた漁労、木材流送、農業の作業風景、都市生活風景などの諸表現の解釈に関する研究発表、およびそれらの発表に基づいた児島恭子氏、舟山直治氏、長島淳子氏によるコメント、参加者からの意見をお聞きし、大変な勉強をさせていただいた。

しかしながら、筆者なりにこの研究会を振り返ると、『生活絵引』作成にむけての大きな克服すべき課題として、歴史学的あるいは民俗学的には、近世の生活の様子を描かれた事実をもって理解するという目的がある一方で、美術史的には、描かれたものを、史実を探る材料として信用するためには大きな困難がある、との考え方の違いが浮かび上がったように思われた。

筆者自身、どちらかという美術史側からの立場にたつて、アイヌ風俗図の中でも特にクマ祭り（飼育を伴うクマの霊送り）を描いた図に焦点をあてて分析し、論文を発表したことがある。筆者は、この論文において、クマ祭り図を史実とイメージのはざまに揺らぐ絵画ととらえ、現段階で史実を明らかにするための絵画として多用することは危険であり、その前に美術史的あるいは芸術論的に省察することが重要と訴え、芸術学や美術史が多民族共生の立場から芸術論を振り返り、日本辺境文化史の議論の中に参加していただくことの必要性について、問いかけたのである〔池田 2006〕

しかしながら、筆者自身もまた、民族学、考古学の目的と美術史の考え方の相違、およびその克服について踏み込まないままに議論を打ち切っていたことへの反省感を、この研究会への参加をとおして、改めて感じた。同時に、これまで美術史で議論対象となりにくかった素人絵など、芸術作品などとは呼ばれにくい絵画の存在意義はいったいどこにあるのか、という基本的な問題を再考する必要性にせまられた。

ところで、クマ祭り図のみならず、近世、近代の風俗画は、なぜ鳥瞰の視線から描かれることが多いのであるのか。絵画の技法としてはあたりまえのことかもしれないが、筆者は常々疑問を抱いてきた。鳥瞰図とは、文字どおり、鳥が空を自由に羽ばたくように、高所の目線に立って、地球上の地理や風景を俯瞰した絵画の一分類である。もともと鳥瞰図は、人間には自分の目の高さにはない高い角度からできるだけ全景を把握し絵にするという創作欲求があり、それを実現するために人間の目線からは隠れる奥のものを画面の上部に描くことによって実現されてきた絵画手法として、位置づけられているようである〔堀 2001など〕

しかしながら、筆者は鳥瞰の視線から描く理由には、さらなる理由が隠されていると考えている。例えば、菊池氏が発表した菅江真澄の描いたコタンの風景を例としてあげるならば、なぜ菅江真澄はこのアイヌのコタンのほとんどを鳥の視線から描いたのか。一つには、鳥の目線から描くことにより、コタンの全景を一枚の紙に描くことができ、コタンとしての臨場感を得られることであろう。そして、二つには、人間の目線から描いたコタンと鳥の目線から描いたコタンでは、その情報量に圧倒的な差が生じるということである。

これら普段の人間の目線よりも高い位置から描いた風俗画の多くは、自身の目線を定点において、対象を忠実に筆写した「写生」ではあるまい。「写生」であるとするならば、たまたま自身が高い位置（例えば、峠や高台など）にいたか、あるいは考えられるとすれば、木や岩に登って描いたかということになる。しかし多くは、あらゆる角度から対象となる空間を詳細に観察し、そのデータを人間の脳の中で三次元的に再構成し、一画面に描いたものであろう。その観察のためには、木にも岩にも登ったであろうし、そのような多様な目線からの観察データの複合が、このような鳥瞰図的風俗画の性格であると考えている。

例えば、沢田雪深作『蝦夷熊祭乃図』（『風俗画報』第23号挿絵、1890年）は、鳥瞰図的絵画であり、一枚の絵

画に何コマもの場面を重ね合わせたに等しい情景描写となっている。それは、クマ祭りの一瞬の場面を写實的に切り取ったものではあるまい。クマの首を絞め、祭壇に安置する前後の数時間を、一枚の絵画に凝縮させたものではないだろうか。



沢田雪彦作『蝦夷熊祭乃図』(1890年、『風俗画報』第23号挿絵。復刻版：明治文献、1973年～)

『蝦夷熊祭乃図』には、アイヌの風俗の記録という側面に加え、沢田雪彦の絵師としての時間表現の努力がしのばれる。筆紙には表現しきれないほどのさまざまな出来事を、時間の経過とともにクマ祭りの現場で目撃した。雪彦が把握し記録しようとした視覚世界は、絵師としての意識作用と手の動きを通じ、多分に「時間」を有する絵画となってその命を開花させたのである。すなわち数時間、ないしそれ以上の時間の中で、その場所を舞台として起こった出来事を凝縮して説明することさえ、絵巻物ないしは鳥瞰図的に仕立てれば可能だということである。

いずれにせよ、鳥瞰の視線から描かれた風俗画は、絵画の技法論として位置づけられる一方で、作者の観察と説明努力の賜物としても位置づけることができるのである。反対に、情報量と臨場感を求めるならば、風俗画は鳥瞰図的構図を採用せざるを得なくなってくる傾向があると言ってもよい。しかしながら、写生と比べ、観察から創作に至る再構成の過程の結果、器物などの細部がより省

略化されて描かれる可能性も指摘しておく必要がある。

このように鳥瞰図的絵画を位置づけるとするならば、たとえそれが素人絵であろうと、過去の何某かの創作活動の成果品が、現代に残っていること自体の意義を認めざるをえないであろう。鳥瞰の視線から描かれた風俗画の背景には、過去の気さくな人物が、当時の生活を説明し、あるいは後世に伝えようとした努力などが秘められている。後世に生きる我々が、少なくともその努力に対して敬意を払い、それを学問の土壌に引き上げることは、先人の残したものに対する、歴史を扱う研究者の義務であろうと思う。

鳥瞰の視線をめぐる、神奈川大学COE公開研究会の内容をふまえて、以上のように考えてみた。そして筆者は、この神奈川大学の試みが、絵に描かれた事物一つ一つを学際的に議論することにより、より深く歴史や人間、情報、技術などをめぐる諸現象を総合的に思索できる機会でもあると確信した。歴史学や民俗学と美術史の一見相対し

ているかに見える当プログラムに、絵画の人間学ないし絵画の情報学ともいべき新たな研究領域への昇華を含めた議論を期待したい。

「学際的研究」という言葉が流布してから久しい。しかしながら、そのように銘を打ちながらも、その後の現場でおこった実態はどのようなであったろう。そのような「学際的」な議論環境がありながらも、再び専門に閉じこもる時代に戻ってはならないと思う。まさに、研究者も鳥のような目線に立って、学問を広く見渡し、再構成を試みるのが求められているのではないだろうか。

#### 参考文献

- 池田 貴夫 2006 「日本北方民族学と絵画『クマ祭り図』の分析をとおしての問いかけ」『美学芸術学』第21号、16～37頁。  
堀 淳一 2001 「鳥瞰図を鳥瞰する」『鳥瞰図絵師の眼』住友和子編集室+村松寿満子(編) INAX出版、12～21頁。